

私は今、「言語文化」をどのように捉えるか

——コミュニケーション教育としての言語教育

塩谷 奈緒子

1. はじめに
2. ことばは何のためにあるか、コミュニケーションとは何か
3. 文化とは何か
4. 日本語教室における教師と学生との関係
5. 私にとって言語文化とは何か

1. はじめに

私は、自分のコミュニケーション観をしっかりと確立する為に大学院にやってきた。直接のきっかけとなったのは、構造主義の一時代を築いた人のもとで教育を受け、アメリカの大学で日本語を教えたことであった。そのメソッドでは、「話しことば」に重きが置かれ、しかもそれは“authentic”でなくてはならなかった。この場合の“authentic”とは、「日本で実際に使われているような自然な日本語」を意味する。そして、このメソッドの下での主な教師の役割とは、以下のものであった。まず第一に、学習者の中にしっかりと文法体系を確立すること。そして、その為に、段階的、かつ理論的に文法や語彙を導入すること。第二に、学習者に自然な日本語、自然な発音のモデルを提供し、学習者の発音を修正すること。そして、第三には、日本で実際に使われるような“authentic”なコンテキストを教室場面で次から次へと再現し、学習者の既習の全文法能力及び語彙力を駆使させて学生から日本語を引き出すことであった。そのメソッドでは、全ての発話は何らかのプロップを使用し、「コンテキスト」を伴わなくてはならなかった。従って、教室では従来のオーディオリンガルから

連想されるような無味乾燥で機械的なドリルは一切排され、授業は、教室全体を巻き込んだインターアクティブなスタイルで行われた。

以上のような「コンテキスト」を伴って行われる語学教育や、「コンテキストの提供者」という教師の役割は、当時の私にとっては目新しいものであり、当初私はその教授法に非常に創造力を刺激された。しかし、教え始めてしばらくすると、ひとつの疑問が沸いてきた。それは、「果たして自分のやっていることは、学生達のコミュニケーション能力の育成につながっているだろうか」という疑問であった。確かに、授業形態はインターアクティブで、学習者から日本語を引き出すという形をとっている。しかし、学生達がクラスで行っていることは、積み上げ式に導入された限定された会話、文法、語彙を頭の中で整理してパズルのように組み合わせていく作業である。そして、更に、どんなに教師が努力したところで、教科書に基づき、教科書の内容を拡張する為に教室で再現されるコンテキストには、“authenticity”の限りがあるように思われた。私は、自分の学生達は、これだけで日本に行って本当に日本語を使って人とコミュニケーションができるだろうか、と考えるようになった。そしてその疑問は、「コミュニケーション能力育成の為に言語教育」とは果たして何なのか。そもそも、そう言われる時の「コミュニケーション」とは一体何なのだろうか、という疑問へと変わって行った。私は、「自分にとって、コミュニケーションとは何か」という重要な問題を真剣に考えることなく、日本語を教え始めてしまった自分に気付いたのである。

以上のようなことを考えるようになった背景には、自分自身の外国語学習経験もあった。ひとつは、失敗例としてのロシア語、もうひとつは成功例としての英語である。私は学生時代、ロシア語を専攻し、ロシア語文法理解とその運用練習、さらに、旧ソ連の文化教育 — 社会、文学、芸術等の教育 — を受けた。そして、その結果、当時文法的には問題なくロシア語を話し、聞くことができた。しかしながら、最終的に私はロシア語の習得に失敗した。旧ソ連も何度か訪れたが、文法的にはかなり正確なロシア語が操れるにも関わらず、人とのコミュニケーションはうまくとれなかった。そして、その結果、私は最終的にロシア語に対する興味を失ってしまった。今にして思えば、私はロシア語はできたが、ロシア語を使って人とコミュニケーションをはかる力に欠けていたのだと思う。ことばとそれを実社会で運用する力が連動していなかったのだと思う。私は、この経験からも、ことばの学習が人とコミュニケーションを行うことと結びつかないのであれば、それでは意味がないのではないかと考えるようになった。

また、私はアメリカで日本語を教える傍ら、学生として大学で勉強する機会を得た。大学で様々なクラスを取り、本を読み、考え、レポートを書き、自分の意見を発して人とのインターアクションを繰り返すうちに、私の英語力は飛躍的に伸びた。そして、言語能力が向上すると、それに比例して上記の種々の能力も向上し、それがまた更なる言語能力の向上に繋がった。この経験は、自分に新しい言語観、人生観を与え、英語の習得とそれによって得た力は、その後の自分の日本語環境にも影響を与えた。非常に苦しかったが、非常に生きている感じがした。私はアメリカで、ことばは自分の考えを取り出す大切な手段であり、言語教育は単なる文法教育以上の意味を持つのではないかと考えるようになった。しかし、私がアメリカで英語を習得した方法は、それまで私が日本で外国語を学習した方法やアメリカで日本語を教えていた方法とは、あまりにもかけ離れていた。そして、このことから、今後も自分が言語教育に携わっていきたいのであれば、自分が目指すものは文法の習得だけにターゲットを絞った教育ではないのではないか、と思うようになった。

以上のような背景から、私はまず、「自分にとってコミュニケーションとは何か」という問題を明らかにしたいと思った。そして、そのような私にとって、この言語文化研究のクラスは、自分のコミュニケーション観を整理する絶好の機会となった。全体的には自分の考えに大きな変化は生じなかったが、本クラスのおかげで、今まで自分では考えの及ばなかった部分や足りなかった部分にも光が当てられ、以前は断片的であった自分の考えも徐々に形をなしてきたと思う。もっとも、私の考えはまだ浅く、これからも変わり続けて行くと思う。しかし、だからこそ、大学院入学後約4か月を経た今現在、自分が何をどう考えているかをこのレポートにカタチとして残しておきたいと思う。

*以後使用する『』内の語は、細川担当が本授業で使用した語（塩谷が引用する語）とし、「」内の語は、塩谷が何らかの意味付けを意図し、個人的に括弧付けして使用する語とする。

2．ことばは何のためにあるか、コミュニケーションとは何か

私は、大学院入学前に、コミュニケーションとは「自分が相手に理解して欲しいように相手に理解され、相手が自分に理解して欲しいように相手を理解する」一連のプ

ロセスだと考えていた。そして、その一連のプロセスの中を行き来し、重要な役割を果たすものがことばであると考えていた。また、人間はひとりひとりが全く違うのであるから、人の認知システムや言語システムも厳密に同じはずがないと思っていた。人は自分が気付いたことしか認識できないし、自分が経験したことしか真に理解できないと思う。また、人はそれぞれ自分の経験からことばの意味やその組み立て方を決して行く。従って、同じ物を見聞きしても、ものの受け入れ方や解釈の仕方、言語表出の仕方は人により、場により異なるはずである。そして、このことにこそ、人とコミュニケーションすることの意味がある。人とことばを交し合いコミュニケーションをはかることによって、人はお互い作用し合い、変わり得る。私は、これが自分が他者と関わって生きることの意味だと考えていた。ここまでが、私が以前から持っていたコミュニケーション観である。しかし、この「一連のプロセス」への考察は、本クラスや総合クラスへの参加を通して各段に深められることとなる。

私は、本授業や総合クラスへの参加により、以前から考えていたこのような事を、さらに深く考える機会を得た。とりわけ、この一連のプロセスにおける「考える」ことの重要性を再認識した。授業内容については、細川の『場面認識』や『文法事実』の論ももっともだと思えたし、『他者の考えていることはブラックボックス。他人と分り合えたと思うこと自体が大きな間違い、勘違い』という旨の話も、自分の過去の経験を鑑みても、その通りだと思った。他人の内側—考えていること—は外側からは窺い知れないし、それどころか、自分自身で自分の内側を把握することさえままならない時もある。その上、人が考えていることは流動的で、同じ場所には留まらない。従って、私は「黙っていても分り合える」というような人間関係は信じない。コミュニケーションにおいては、非言語コミュニケーションこそが大きな役割を果たす、という説もあるが、そうは言っても、私はコミュニケーションの基本は、やはり「ことば」であると思う。結局、お互いが『ブラックボックス』であるからこそ、私達は考え、ことばを発し、他人からのことばを受けてまた考える姿勢を持ち続けなければならないのだと思う。

この3ヶ月間、私はことばについていろいろなことを考えたが、私にとっては、このクラス自体が、自分や他人がことばを発する際にどのような言語表出—『外言化』—のスタイルを取るのか、そしてそれが互いにどのように影響しあうのか、等について考える格好の材料となった。そして、ことばの『往還関係』の各プロセスは互いに密接に結びつき、そのひとつひとつのプロセスを独立して取り出すことは不可能であることを確信した。以下に、このクラスと総合クラスを通して、私が「ことば」につ

いて考えたことをまとめてみたい。

まず、ことばを発する時には、そのはじめの段階として、自分の中の考えていること、『内言』をことばで切り取り、カタチ有るものとする必要がある。『内言』には、容易に言語化できるものもあるし、なかなか言語化できないものもある。この思考と言語化の関係は複雑である。例えば、自分があることについて何となく分かったつもりでも、いざことばにしてみようと言語化できないことがある。このような場合には、考えることが足りないのかもしれないし、思考を言語化することばに問題があるのかもしれないし、或いはその両方に問題があるのかもしれない。このことにも、思考と言語を切り離して捉えることが難しい事実が現れていると思う。一方、容易に思考が言語化できたとしても、必ずしもその人がその問題についてよく「考えている」とは限らない。なぜなら、何の苦もなく即座に言語化できる場合には、次の2つの場合が考えられるからである。1つ目は、その人がその人なりによく考えて、その人の思考レベルが本人にとって十分外言化するに足るレベルに達している場合。そして、2つ目は、実は全然「自分で」考えていない場合である。人間の意識の表層には、いろいろなものが漂っていると考えられる。そこには、かつて自分で考えて、かつての自分が考え出した事柄もあるだろうし、現在の自分が考えている途中の事柄もあるだろうし、他人からただ受け取ったまま宙ぶらりんの状態になっている事項もあるだろう。従って、自分の意識の表層に浮かんでいる何ものかを手っ取り早くすくいにとってことばにすると、それは必ずしも「その時の自分」が考えていたことではないかもしれない。他人から受け取ったことばをよく吟味せずに自分のことばとして発する人はよく見かけるし、自分で吟味をしたからと言って、何が正しいという問題でもないだろう。しかし、まず『自分をくぐらせて』考えることは、『往還関係』の原点であり、個人として社会で生きる上での原点でもあると思う。

次に、自分の考えていることを言うか、言わないか、という選択も、コミュニケーションのプロセス中の重要な局面であると思う。これは、人の性格的要因や周りの環境—それぞれの場や、相手、話題、必要性、緊急性等—によって大きく左右される。いずれにしても、「この場でことばを発する必要がある」という判断のもと、他者に向けて発信されたことばが『外言』である。そして、自分の考えを『外言化』する際にまず大切なことは、自分で納得がいくように、且つ、相手が理解し易いよう配慮して外言化することであろう。自分では自分の言ったことが非常に明確であると思っていなくても、他人にとってそれが必ずしもそうであるとは限らない。そもそも、自分の考えていることを他者に100%伝えることは不可能であるが、自分のことばをコントロ

ールし、モニターする配慮が無くては、尚更相手には伝わらないと思う。更に、自分の考えを『外言化』するからには、それが他者に影響を与え得ることを自覚し、責任を持ってことばを発することも大事だと思う。ものごとをどれくらい考えた上でそれを外言化するかは、人によって、場によって、異なるだろう。あまり自分で考えないうちに思いついたことを即、口にする人も居るだろうし、十分自分で考えて、ある程度の思考レベルに達しないと外言化しない人もいると思う。これは、人によりいろいろなスタイルがあると思う。しかし、いずれにせよ、一度ことばを発すれば、その解釈は完全に他者に委ねられる。従って、ことばを発する際には、ある程度の「配慮」と「覚悟」が必要であり、それが自分が意図したように相手に伝わらない場合には、それをまたことばによって調整していく姿勢が必要だと思う。

往還関係のプロセスでは、「自分の言いたいことが言えればおしまい」ではない。それではあまりにも自己完結的で、ことばを発したことが単なる自己満足で終わり兼ねない。本クラスを見ていると、よく考えて自分の意見を発することと同じくらい大切なことは、他人の意見を受けてそれをまた考え、必要であればそれを調整していくことだと思った。自分にとってブラックボックスである他者が、自分が言語を発信したプロセスと同様のプロセスを経て自分にことばを投げかけてくる。そして、そのことばを自分の中に受け入れ、再度考え、自分の更なる思考の糧とする。このプロセスこそ、ものごとを自分とは異なる視点から捉え直し、自分の思考の幅を広げるチャンスである。その上で、自分の考えが変わる人もいるだろうし、変わる必要がないと判断すれば、変わらなくて良いのだと思う。ただし、思うに、たとえ変わらなくて良いと判断した場合でも、何も考えることがないまま変わらない人と、考えた上で変わらない人との間には、差が生まれると思う。他人から受け取ったことばを自分の中に受け入れるのも、それを解釈するのも、所詮自分本位で行われることかもしれない。しかし、だからこそ、こうしたことを自覚した上で、相手のことばを受けて考え、自分がどう考えるかを再発信する必要があるのではなかろうか。ことばによって誤解が生じることもあるだろうが、自己完結的、ひとりよがりな解釈から少しでも逃れ、誤解を修復できるのも、やはりことばしかないと思う。以上が私が本クラスや総合クラスでのインターアクションを通して考えたことであるが、この『往還関係』はエンドレスに続いて行く。そして、この『往還』こそ、人間が人間として生きる意味だと私は思う。

3．文化とはなにか

ことばの場合と同様、私が文化について真剣に考え始めたのもアメリカ滞在中だった。アメリカで教え始めた当初は、疑いもなく、「お茶・お花・能・歌舞伎」の類のものを「日本文化」だと思っていたし、生徒達が日本に行ったら、「文化的に正しく」行動しなければならない、と思っていた。よって、私は、生徒達のモチベーションを高める目的で迷いもなく「日本文化」の知識を学生達に与え、学生達が日本で「文化的に正しく」行動できるように、「日本に行ったらこうしなくてはならない」という助言も与えていた。しかし、しばらくすると、学生全部が「日本文化」に興味を持っているわけではないし、仮に持っていたとしても、個々人によって興味の対象は全く異なる、というしごく当たり前のことに気付いた。そして、「文化的に正しく」とは一体誰が決め、誰にとって正しいのか、と考えるようになった。日本に行ったら、私の生徒たちは日本人のように行動しなくてはならないのか。しかし、それは、そもそも不可能なことだし、それを決めるのは私ではないことは明らかだった。また、自分が外国人としてアメリカで暮らしてみても、「アメリカとは何々」「アメリカ人とは何々」「アメリカ文化とは何々」などとはとても人には語れないと感じるようになった。友達に何かを聞かれて答える時も、それは「広い広いアメリカのうちで私が知っている小さな小さな世界についての、私が感じたこと」という具合に語る自分に気がついた。また、私が渡米前に人や本から得た「アメリカ/アメリカ人とは何々」などという知識も、私にとってはあまり役に立たなかった。それどころか、それらは当初、私にとっては、ものごとを自分の目で見極めていく上での障害にさえなっていた気がする。このようなことに気づき始めてからは、私は学生の前で「日本とは/日本人とは/日本文化とは」とは語れなくなった。そして、「一体、文化とは何だろう」と考えるようになった。

このような背景のもと、文化について考え始めた私は、文化を認知のシステムとして捉えることに違和感を感じなかった。日本に帰ってきてから、文化の定義にはいろいろあることを知ったが、結局、従来の文化の定義とは、細川が『物質、行動、精神』と分類していた全部を文化として捉え、「人間そして人間が関わる全てを包括したものが文化」とするようなものが多いことを知った。しかし、そう定義すると、細川が述べるように『文化の境界線をどこに引くか』という問題が必ず生じて来る。結局、この矛盾点を解消する為には、人間が世界を認識する総元締め ―ひとりひとりの認知のシステム― を文化とし、文化を個々人のレベルに帰すしかないのではなからう

か。私は、それまでも、過去に出会った多くの人が自分に影響をもたらしていることを意識していた。そして、それはまさに、人間ひとりひとりが独自の存在で、各々オリジナリティーを持っており、その結果、人間同士が互いに呼応し合い、作用し合う可能性を持っているからだと考えていた。そのように考えていたせい、私は、細川の『個の文化』や『人間の中に社会がある』ということばを自分の実感を持って受け止めた。

そして、文化を個に帰するからには、当然『一対一のコミュニケーション』が重要となる。そして、ここでは、授業中にも何度も議論されたように、人を『集団類型化』して捉えないこと、『ステレオタイプ化』しないこと、そして何事も『自分をくぐらせて』判断することがポイントとなろう。自分の経験から考えてみても、現実のコミュニケーションは、『自分をくぐっていない』情報や『類型化』された情報で処理できるほど単純なものではないと思う。確かに、統計的には、集団の中に何らかの傾向を見出すことはできるかもしれない。しかし、それを個人レベルのコミュニケーションに適用しようとするのはあまり意味がないのではないだろうか。ある現象がある集団の中に見出せるのなら、それは、その集団の中のある個人の中にも見出せるはずである。その現象がある個人の中に見出せるのであれば、人を認識するプロセスは、始めから個人のレベルでスタートさせれば良いのではないだろうか。私は、人が人や物に対して下す判断は、相対的なものであると思う。従って、人が判断した判断基準を自分の中にそっくりそのまま取り入れて使用することは意味がないと思う。私としては、新しい環境で生きていくためのノウハウは、最終的には『命に別状がない限り』、自分自身で体感、体得していく他ないと思う。これらのことは、自分の母社会では自然に行っていることであり、それは日本で生活する時にも、外国で生活する時にも、基本的には同じことではないだろうか。しかし、その一方で、「知らないことは知りたい」「知っていれば安心」という理由で、学生が情報を求めてくることも知っているし、教師が親切心のつもりで学生に情報を与える気持ちも分からないでもない。しかし、私は、教師が情報を学生に与えるからには、その情報が学生の世界の認識の仕方に大きな影響を与えることを十分知っておくべきだと思う。

また、仮に『集団類型化』の罠からは逃れられても、ものごとや人を『ステレオタイプ化』してしか認識できなければ、結果は同じである。確かに、細川が述べるように、『人間はレッテル貼りの宿命からは逃れられない』だろう。しかし、ここで大切なことは、自分ではじめにレッテル貼る時には、そのプロセスをきちんと把握すること。貼ったレッテルを絶対視しないこと。レッテルはまたいつでも剥がされ、貼りか

えられるような状態にしておくこと。そして、レッテルを貼り替え続けていく為には、常に新しい可能性に対して自分をオープンにし、まさに個々人が『往還関係』によって考え続ける姿勢が必要なのだと思う。いちばん人間として成長しないのは、理由もきちんと把握せず、無意識のうちに人やものにレッテルを貼り、さらにそれが固定化してしまうことだと思う。自分を含めて、全ての人は多かれ少なかれ変わり続ける。従って、大切なことは、その時その時の考えは常に持ちつつも、そこで立ち止まらず、さらなる他者とのインターアクションを通して考え続けることだと思う。ここでのキーワードも、やはり、『往還関係』なのである。

4．日本語教室における日本語教師と学生との関係

本クラスは私に、教師と学生との関係について新しい観点から考える機会を与えてくれた。授業以前の私の教師観は、教師がクラスで学生に単に知識や情報を与えるだけの存在ならば、学生は本を読めば良いのであって、本を読めば分かる事をクラスでするのは教師の存在意義がない。また、人間は縁あって出会えば、互いに何らかの作用を及ぼし合うのだから、教師と学生との関係においても、（序列が完全に無くなることは不可能にせよ）序列を強く意識せずに、互いに尊敬し合い、学び合い、影響し合うことは可能だと思っていた。少なくとも私には、アメリカでそう思える先生方との出会いがあった。そのような私に、本クラスは、日本語教師と学生との関係についてもっと踏み込んで考える機会を与えてくれた。結果、自分はどのような教育、どのような教師を目指すのか、という問題を考え始める良い機会となった。

まず、『教材/教授ヒエラルキー：教材が存在することによる教師の優位性』についてである。私は今までこの問題について全く考えたことがなかった。しかし、このクラスを通して、自分の経験から以下のようなことを考えた。クラスにはその教材についていちばんよく知っている教師がいる。そして、生徒達は、その内容をどれくらいよく理解したか、という観点から評価される。大抵、学生は「評価される」ということに対して敏感である。よって、学生達は結局、その教材や教師の評価者としての目に捕らわれてしまう。結果、学生達が教材の内容を「超えて」自ら自由に考える、ということは困難になる。また、ここでは、教師自身が自分の知識、権力が及ぶ範囲外に学生が飛び出して行くことを恐れて、意識的、または無意識的に「教材を超える」ことを阻むこともあり得る。いずれにしても、学生達は教材を超えて考えないのであ

るから、教材を超えてことばを紡ぎ出すこともない。また、このように、教師と学生間の序列が明らかに存在する中では、対等な人間関係が成立することは難しいし、対等な人間関係が成立しない中、『双方向的』で、活発なコミュニケーション活動が展開されることも難しい。私はアメリカで、教室内外で学生とのインターアクションを楽しみ、学生と良い関係が築けていたと思っていたが、この観点から振り返ると、自分にはまだ問題点があったのではないかと思った。この問題を考える際には、自分が日本語を教えていた時、自分が日本で外国語を学んでいた時、そして、はるかに遡って、自分の小学校、中学校時代のことも考えた。この問題は、日本語教育にあてはまるだけではなく、非常に普遍的な問題だと思った。この問題は、今度さらに深く考えていきたいと思った問題のうちのひとつであった。

『教材/教授ヒエラルキー』の問題は、『学習者主体』とは何か、という問題にも繋がる。以前、私は、『学習者主体』という意味に関しては、「学習者のニーズを把握することは大切」程度にしか捉えておらず、深く考えたことがなかった。しかし、このクラスを通して、『学習者主体』とは、「単に学習者のニーズにあわせる」という意味ではない、と思うようになった。学習者のニーズは多様であり、その個々のニーズに教師があわせていくことは不可能である。従って、大切なことは、まずは教師が自分自身で自分が価値を信じるもの、目指すべきものを明確にし、自分の理念に基づいて教育を展開することである。そして、ここにおいても、教師自身、その理念自体は『強固で柔軟』であるべきで、それは『往還関係』により、進化し続けていくものだと考えた。そもそも、全ての学習者の興味、関心を喚起するような教材などこの世には存在しない。例えば、クラスで話題になっていた例を考えてみる。私は、学習者が教師から一方的に自分の興味のない教材、関心のない教材を押し付けられて、「これについて話さない」と言われても話が続くわけがないと思う。そして、このように教師が学生に教材を投げ放した状態で、教師が「生徒が話さない」と嘆くのは、教師の怠慢だと思うし、これぞ教師が「言語教育の為の言語教育」の罫にはまっている例だと思う。そもそも、日常生活の中で、自分の興味のないことをよく知らない人達と延々と話し合う、などということがあるだろうか。もし、仮にあったとしても、それは、非常に浅薄で意味の無い会話に終始するのではなかろうか。互いへの『信頼性』が欠如している中で、しかも本人の関心や注意を喚起しないものを題材として、学習者が主体的に考え、ことばを発することはあり得ない。逆に考えると、学習者が真に考え、ことばを探し、ことばを発する題材とは、学習者自身が真に興味を持つことができ、学習者自身が無限に考え、話すことのできるような可能性を持つ題材であろう。

上記の教材の問題と関連し、学習者を真に考えさせ、学習者自身の深いレベルからことばを引き出す為には、教師による自然なセッティングの提供が不可欠だと思う。私は、このことを、私が受講した他のコミュニケーション教育のクラスで実感した。自分と異質なものに対する気付きを学生に促すにしても、教師による人工的なセッティングのもとでもたらされた気付きが、本当に現実の場面で活かされるだろうか。また、現実の社会では、「気付き」だけでなく、「それを如何に自分の力で乗り越えられるか」ということこそが大事なのではないか。そして、問題に対処し、障害を乗り越えて行く為には、他者とのことばを介してのコミュニケーションが不可欠である。しかし、この「他者と話し合う」という行為の訓練が、不自然なセッティングのもとに行われれば、それはただのことば遊びで終わり、何の意味もなさないのではないだろうか。例えば、私は授業中に、「あなたを木に喩えてあなた自身について話さない」と言われても、私は木ではないので自分を木に喩えて自分を語ることはできなかったし、「学校での子供の問題を、あなたがブラジル人児童の父兄になったつもりで話さない」と言われても、私はブラジル人の父兄ではないのでその問題を真剣、且つ親身になって話し合うことはできなかった。私は、ここでの問題点も、教師が学生に学生の実感を伴わない、血肉の通わないような対話練習をさせている点ではないかと思う。このような状況下では、話し合い自体がことば遊びで終わってしまうし、それでは結局、真の意味でのことばの学習、そして、コミュニケーションの学習にはならないと思った。結局、『往還関係』のどの部分が欠けても、コミュニケーション教育にはなり得ないのだと実感した。

5．私にとって言語文化とは何か

私は、『往還関係』のモデルを、「コミュニケーション」として捉えている。そして、「2．文化とはなにか」で考察したように、そのコミュニケーションのモデルにおいて、自分の流動的な考えを切りとって形あるものとするのもことば、他人に自分の考えを理解してもらう手段として自分の考えを発信するのもことば、そして、他人の考えを理解する為の手段として他人から受信し、他人の考えの解釈を行うのもことばである。さらに、「3．文化とはなにか」で考察したように、人間の頭の中の部分—思考や認識力—は、コミュニケーションモデルの要となる。以上のように考えると、ことばも文化も全てが『往還関係』のモデルの中に集約される。『往還関係』では各ブ

ロセスが密接に関わり合い、その『往還』がエンドレスに続いて行く時にこそ、真に生産的なコミュニケーションとなり得る。私は、本クラスや総合クラスへの参加により、ことばがひとりひとりの人間をつなぐ非常に重要な媒介であることを再認識した。そして、『往還関係』のモデルは、まさに、人間が他者と関わり合い、お互い影響を及ぼし合いながら生きていくことの意味をも現していると思う。

『往還関係』がなければ、人間は自己完結的な存在である。しかし、個人のことばや文化は、『往還関係』によって世界を駆け巡る。例えば、現在の私の『個の文化』を形作っているものは、私が過去あらゆる場所で接触した様々な人の『個の文化』の影響であると言える。私は、後天的な他人からの影響は、先天的、後天的に両親や家族から与えられたものに負けず劣らず大きいと思う。そして、私に影響を与えてくれた『個の文化』の影響は、その『個の文化』がこの世から消滅しても、私の中に残る。そして、私の『個の文化』がこの世から消え去っても、それも誰かの中に何らかの形で残るのではないだろうか。そうやって人間同士は互いに影響を与え合いながら自分自身を創り出し、創り替え、延いては人間世界を創り出し、造り替えているのだと思う。繰り返しになるが、それを可能にしているのは、『往還関係』— 言語文化である。従って、私は、言語文化を「人間として生きる力」、「人間として生きる意味」と捉える。だからこそ、言語文化教育は、単なる文法学習で終わってはならず、もっと広く、「コミュニケーション教育」、そして、細川の言葉で言えば、『人間教育』として捉えられねばならないのだと思う。